

1999年度

トラークル協会会報

第5号

2000年3月

トラークル協会

〒271-8587 千葉県松戸市栄町西 2-870-1 日本大学松戸歯学部独語研究室気付

Tel. Fax 047-360-9308

1999年度春季研究発表会
レジュメ・質疑応答

トラークルの詩の評価と受容
—— ドイツ語圏における現代詩人の場合

三枝 紘一

ここではフィンクとヴァイクセルバウムがドイツ語圏の詩人に対して出したアンケート「ゲオルク・トラークルの作品あるいはその人となりについてあなたの理解とあなたの創作にとって何らかの点で重要でありましたか、あるいはありますか、またあなたは20世紀のドイツ語文学において彼の作品にどのようなランク付けをしますか。」に対する詩人たちの回答を小論の対象とする。この回答は『Antworten auf Georg Trakl. Hrsg. Adrien Fink und Hans Weichselbaum. Salzburg, 1992.』として一本に纏められている。

最初にアンケートの後項、「あなたは20世紀のドイツ語文学において彼の作品にどのようなランク付けをしますか。」についての回答を列挙し、それについて論評を加えることにする。

Franz Braumann : 「トラークルの文学のランクは今日20世紀のドイツ語文学において非常に高くしかも確固としていてほぼ彼に匹敵する詩人はほんの数えるばかりである。」

Catarina Carsten : 「私にとって彼は数世紀に一度送られてくる偉大な者の一人 —— ヘルダーリンの後代の弟 —— である。」

Albert Drach : 「ゲオルク・トラークルのように、彼以後は誰一人として、そして彼以前はおそらくメーリケ以外誰も完全に新しい内的響きをポエジーに持ち込んだ者はいないということが私には分かっている。」

Ernst Jandl : 「トラークルの詩は20世紀のドイツ語文学において非常に重要な地位を確保している。誰も彼のように深い憂鬱、恍惚とさせる美、甲高い不協和音をドイツ語の詩において結合することが出来なかった。私は彼の詩が最大限確固たる位置を占め続けることを疑わない。」

Friederike Mayröcker : 「私がトラークルを読んでからは常に20世紀のドイツ語文学は彼の作品を除いては考えられなかった。」

Andreas Okopenko : 「私はトラークルをドイツ語文学の最大の詩人の一人だと思う。」

Ingrid Pukanigg : 「もちろんトラークルは、私にとって少なくとも20世紀の独特な、ドイツ語の詩人であり、ドイツ語文学において重要な地位を占めている。」

Wieland Schmied : 「ゲオルク・トラークルは今世紀のあらゆる詩人の中で比較を絶する。」

Erich Wolfgang Skwara : 「現代文学における彼の文学のランクは他の人が測定し決定してきた。その判定が高いランクにあると評価すればするほど、私はますますそれに賛同する。」

掲載されている36編の回答の中、トラークルの評価について答えているのは、上に挙げた9人に過ぎない。この事実は意識的に回答を避けたのか、あるいは研究者とは異なる詩

人の性向に依るものか詳らかにしないが、おそらく後者であろう。いずれにせよ上に挙げた回答に限れば、そのほとんどは、「私にとっては」と留保している詩人も何人かは見えるが、トラークルの文学を積極的に評価し、煎じ詰めればトラークルを20世紀ドイツ語文学の最も重要な詩人の一人と位置付けている。それはトラークルの影響を受けた詩人は勿論、トラークルの影響を受けなかった詩人、あるいは詩の質や方向性がトラークルのそれとは異なる詩人も高いランク付けをしている(例えば Drach、Puganigg等)。このことはトラークルの高い評価に一つの客観性を与えていると言えるであろう。

しかしトラークルが20世紀のドイツ語文学においてこのように高く位置付けされながらも、例えば、トラークルの文学はこういう理由からそのように位置付けられる、あるいはこの点がそうであるから評価できる、というように具体的に述べている例は殆どない。ただ Drachと Jandlのみが評価出来る要素を挙げている。いずれも実例を挙げていないので検証できないが、Drachの「完全に新しい響きをポエジーに持ち込んだ。」であるが、中期以降の詩には概ね妥当すると言える。次に Jandlの「深い憂鬱、恍惚とさせる美、甲高い不協和音を結合することができた。」であるが、確かにこれらそれ自体相反するように見える三者はトラークルの詩を構成する重要な要素である。しかしこれら三要素が結合されている詩は実際はほとんどないと言えるが、組み合わせは異なりながら、二つの要素が含まれている詩は多い。この意味において、トラークルの詩は同じような情調の詩が多いという従来の一般的な見解とは背馳する見方が目新しく、この点からトラークルの詩に取り組んでいけば、新しい展開が広がる可能性も窺える。

次にアンケートの前項「ゲオルク・トラークルの作品あるいはその人となりが詩についてのあなたの理解とあなたの創作にとって何らかの点で重要でありましたか、あるいはありますか。」に対しても——設問の仕方が余り適切でないことにもよると思われるが——まともに答えている詩人は少ないが、トラークルの詩の特徴を述べている詩人は多い。その点を取り上げ論評したい。

先ずトラークルの詩の特徴を Drachは「沈黙(das Schweigen)」と言い、Peter Härtlingは「柔和な叫び(sanfter Schrei)」また Hannelore Valencakは「抑制(Zurückhaltung)」と言う。トラークルの詩は、初期の詩を除いて一般に声高でないということが言える。これは彼の詩が形象や音韻が優先され、それらが主導的に働き詩を展開させ、メッセージが表面に表われていないことに主に起因しているものと考えられる。このため「沈黙」と把握されるのである。この「沈黙」は言うべきことのない沈黙(=空白)ではなく満ちている沈黙と補足することが出来るであろう。また「柔和な叫び」もこの関連から考えられる。「叫び」は表現主義の詩の主要なメルクマールの一つであるが、これは本来は激しい性質をもつ。従って「柔和な叫び」はやや言語撞着的な表現と言えるが、それにもかかわらずリアリティーがあり、トラークルの詩の本質を直観的に捉えていると言える。単に「叫び」である限り、Drachの言う「沈黙」とは相反する性質を持つ。しかし「柔和な」が冠せられると、一転して類縁性が生ずる。確かにトラークルの詩には「叫び」が窺われるが、それは潜在している。それは優しいヴェールを纏った印象を受ける。

また Valencakがトラークルの詩に感じた「抑制」もこの関連から敷衍的に解釈できるであろう。つまりここでは詩人の感情、情念、想念が抑えられていることを言っているの

であり、「沈黙」に通ずるのである。Valencakは「彼が苦悩を認識させるところでいかなる叫び声(Aufschrei)も生じない。」と述べているが、この点 Härtling の言う「柔らかな叫び」と通ずる。「柔らかな」は「抑制された」ということになる。

言うまでもなくトラークルの詩の独自性を強調している詩人は多い。例えば、Puganigg は「独特な」、また Schmied は「比較を絶する」と言う。Kurt Marti は「私にとって彼のポエジーはドイツ文学の風景の迷子石でありつづけました。比類なく、紛うことなく、ほとんど分類不可能で、いかなる模倣も嘲笑う、絶対的なポエジー。」と言う。その詩の高度な独自性を言っているわけである。ここで「いかなる模倣も嘲笑う」と述べているが、トラークルの後代の詩人に対する影響は大きなものがあった。しかしそれは必ずしも生産的ではなかった。この辺の事情を Schmied は「そこに継承者はいず、エピゴーネンしかいない。」と言っている。また Alfred Kolleritsch は「私は石切り場のようにこれを利用して多くのトラークル- エピゴーネンに危惧を抱いてきた。」と述べているが、トラークルの詩は詩人にとっては模倣したい誘惑に駆られる性格を有しており、否、むしろ知らず知らずのうちに模倣してしまう危険性がある。例えば Conny Hannes Meyer は「詩人ゲルハルト・フリッチェは、私がトラークルから無意識のうちに借用し、私の習作に嵌め込んでしまった多くの詩的要素を見だし、えり分ける際に私を助けてくれた。」と言っているが、この事情をよく伝えている。後代に対するトラークルの詩の影響は大きなものがあるが、しかしそのトラークルにしか表現できない独自性の故にその結果は歴然たる模倣に留まってしまって、言わば縮小再生産を繰り返すばかりで、発展的受容は見られないということであろう。

トラークルの詩は魔力的な魅力を持つと言えるが、これに言及している詩人も複数存在している。例えば Marti は「私は詩が何という魔力(magische Kraft)を持ちうるかということを感じた。」と述べている。また Okopenko はトラークルの詩を魔術的なものとみている。さらに Meyer は「この文学はその読者達にとっては麻薬であるならば、それは神の薬局の処方になるものである。」と述べている。とりつかれるほど余にも魔力的なので麻薬に譬えたわけで、肯定的に捉えられていることは言うまでもない。これに対して批判的に見ているのは、Gerhard Amanshauser で、トラークルの詩を黒魔術(schwarze Magie)と規定する。確かにトラークルの詩は魔術的なところが感じられる。それは主として、その詩が極めて技巧が凝らされた結果であることに由来するものと思われる。トラークルの詩の工房、即ちその稿体変遷を詳細に検討すると、その推敲の跡に驚かざるをえない。詩の語句のいずれもがいかにかンテキストの中で有効に働くかに腐心しているのが分かり、その詩が単なるインスピレーションの所産でないことが判然とする。この作業によって造形された詩が魔術的に読者を魅了するものと思われる。しかし Amanshauser が言うところの黒魔術では酷であろう。

さらに言うまでもなくトラークルの詩を時代との関連の中で見ている詩人がいる。例えば Walter Zrenner は、トラークルの詩が当時の時代の気分をよく捉えており、それには感動させられながらも、もう一方ではそのその詩に描出された世界と現代の現実の世界との深い亀裂を感じないわけにはいかない。そして現代の現実の例として大戦における大量の死、怪物のようなイデオロギー、コントロールを失った激しい交通、一般大衆の倫理的

に無目的な生き方、広範な環境汚染等を挙げている。リルケの「各々に固有な死を」と同じようにトラークルの「汚れからの純化としての死」も現代の大量の死とは対極をなしているというわけである。研究者と違って、確かに現代に生きて、詩作を試みようとする詩人にとっては現代というものが念頭を去らないのは事実であり、したがって前述したような思いを抱懐するのは当然である。トラークルも現代詩人に数え入れられているが、彼が詩作した1910年前後と現代とは世界の様相は極めて異なっている。したがって人間の意識も大いに変化を遂げてしまっているのは明らかであり、詩も当然変わらざるをえない。現代は個人の抒情が許されなくなった状況にあると言ってよいかもしれない。ここに「アウシュビッツ以後の詩」の難しさがあると見てよいであろう。

しかし一方で例えば Jandl は「私の知る限りでは、ナチスの暴力的支配の間トラークルの詩は黙認された。その時に会った者は、それによって将来への勇気づけと希望を感じた。」としている。トラークルの詩は、人を勇気づけたり、今後に希望を与えるものではなく、逆に取られているのが一般の見方であるが、しかしナチスの支配体制下のような限界状況のもとでは、徹底しないヒューマニステックな作品はむしろ仮初めの慰藉にもならず、暗く、絶望的に見えるトラークルの詩世界が逆に救いになることはありうる。それはトラークルの詩が「限界状況の詩」であるからと言える。いかに悲劇的なものでも、共鳴できうるものに遭遇したとき、そこに慰藉、更には救いを感じるものである。それが『グロデーク (Grodek)』の最終三行に見られるようなメッセージがそうであるのか、あるいは魔力的な独特な美的表現がそうであるのか詳らかにしないが、いずれにせよトラークルの詩の一種の零地点における表現と発想がほとんど絶望的な状況にある者たちの共感を喚起し、慰藉更には勇気づけと希望を与えたのであろう。

また Meyer は「今日、私がナチ時代の幼い頃の色々な体験に加えて、私にとって生き甲斐を見いだした後は [すべての道は黒い死滅に終わる。(Alle Wege enden in schwarzer Verwesung.)] のような詩行を最早私の個人的な経験に関連させて読まず、既に私達に与えられた時代と包括的に関連づけることが出来る。」と述べている。ただし原文は Wege、enden ではなく Straßen、münden であり、間違った語の方が象徴性が高いが、原文のままでも、Meyer の意図することにある程度妥当するであろう。確かに『グロデーク』あるいは『嘆き II (Klage II)』のような最後期のメッセージを含んだ詩は、グローバルな危機的状況が顕在化しつつある現代にも通用する、否、むしろ比喩的にはますます通用するのではなかろうか。

更に Kolleritsch は「--- しかし確かにトラークルは今日すでに詩の意のままにならないことをなお表現することが出来た最後の詩人の一人であった。」と述べている。ここで言う「詩の意のままにならない (sich versagen) こと」とは、一つの推測であるが、現代化が進展するにつれて過酷なまでに増殖してしまった新しい対象に満ちた変質した世界、詩人にとって疎隔化された、対象化された (vorgestellt) 世界に容易に一体化出来ないことがその謂であると規定できるかもしれない。と言うのはポエジーは詩人の抒情的自我と外部世界との一体化によって生じるからである。しかしトラークルは、現代におけるこの至難の業を一つの方法によって果たすことが出来た。それは世界が没落しつつあるという牢固たる認識により、世界を「悲劇の場」とみなすことによって、自我も悲劇的境位にあ

るが故にこれと辛うじて一体化することができたということである。その結果が彼の詩世界ということが出来る。

その他トラークル及びその詩がデカダンスか否かの問題を取り上げている詩人もいる。Okopenkoは「作品の沈鬱でデカダンの基調が私の心を乱した。」と言い、Amanshauserは、トラークルを「普通人の立場からすれば変態者あるいは墮落者である。」と見なし、この例証として詩『夜のロマンツェ(Romanze zur Nacht)』に対するフランツ・フューマンの批評を引用している。フューマンはこの詩について「この『夜のロマンツェ』の中にデカダンスの全ての徴憑がなかったらうか。」と述べている。表現主義の詩に特徴的な並列様式(Reihungsstil)の詩に属するこの詩は、ロマンツェというタイトルとは裏腹な内容を持つ詩であるが、これはロマンツェという詩形を借り、これに従来のロマンツェの対象とする「ポジティブな」内容とは対照的なネガティブな内容(その徴憑を挙げれば「狂女」「殺人者」「病人」「女郎屋」「死者」等)を意識的に盛り込んだ実験的な一種のパロディーということができるであろう。確かにこの詩はデカダンの好尚は窺われる。しかし詩的主体がデカダンの世界に沈倫しているのではなく、デカダンのイメージはむしろ对象的に距離をおいて扱われている。その上それらとは対照的なイメージも各詩節に挿入されている。一つ例を挙げれば、第二詩節の1、2行目の格子の嵌まった窓辺の狂女とロマンツェの内容に相応しい3、4行目の恋人達の甘美な舟遊びとの対比である。このような表現の仕方からするとデカダンとは言いがたい。他の場合もデカダンの徴表が鏤められている詩があるし、デカダンの一つの徴表である滅びの気分に身を委ねているような詩も一部にはあるが、詳細に検討すればデカダンとは言えない詩が多い。H. C. Artmannは「その作品は私にとってデカダンではなく、新しい出発を意味した。」と述べている。詩人の新しい形式への果敢な試みに関して言えば、全くデカダンとは言えない。確かに詩人自身はデカダンと評されても、それは否定出来まいが、その詩において求めたものは、一つにはデカダンを超えようとするものであったのではないか。それは詩人自身が「おまえの詩は不完全な贖罪である。」と言っていることから窺える。

その他注目する見方をする詩人として、トラークルの詩をシュールリアリスティックと見ている Kolleritschが挙げられる。詩人の全ての詩がそうでないことは確かであるが、彼はどのような詩を念頭においているのであろうか。それが例えば『安息と沈黙(Ruh und Schweigen)』のような詩であれば、シュールリアリスティックと言ってもあながち的外れではないであろう。この詩の、特に5行目までの非現実的、あるいは超現実的なイメージは、フーゴー・フリードリッヒが「空間の消滅」という現代詩の特徴的表現の一つと規定している、トラークルの他の詩にある表現「白い下着がそれを着けている両肩を焼く(Ein weißes Sternenhemd verbrennt die tragenden Schultern)」と同じような表現であるがシュールリアリスティックなそれと言えなくもない。いずれにせよこの見方は更に検討してみる要があろう。

伊藤卓立 : ヤーコプ・シュタイナーは『Rilke und Goethe』の中で次のように述べている。「詩人にとってロダン、ピカソは分野が違うわけで、それに対してリルケは影響を受けていると平気で公言している。一方そのリルケはゲーテを読

んでいたが、ゲーテ嫌いである有名な詩人であった。ゲーテに対して反発のようなことを多く書いていて肝心なことを何も言っていない。これはリルケにとってゲーテは同業者だから、大いに影響を受けているという自分の固有性が無くなってしまうわけで、自らの Eigenschaft を殺してまでゲーテの影響を受けているとは言えない。自分の Eigenschaft のルーツを余り明かすことをしない。」同じようなところをこのアンケートにも感じたのである。本当に影響を受けて自分にとって大事なところがあるとすると、ほんの小出しにしかしてはいないのではないか。研究者であれば利害関係がないわけであるが、詩人同士の場合はある程度フィルターがかかっているのではなかろうかと思うわけである。勿論参考にはなるが。

三枝 : 一種の企業秘密であるからそういう側面も考慮して読んでいかななくてはならないと思う。確かに影響を受けたということをあからさまに披瀝している詩人はほとんどいない。

高橋喜郎 : 本当に影響を受けている詩人であるとドキュメントになってしまうのではないか。あるいは回答なしになってしまうのではないか。

伊藤 : まさにアンケートであるから、その回答は十人十色で各人各様であろうと思うが、トラークルの詩に対しても全員が一つの同じイメージを持ちうることはありえないわけで、それが文学作品であることの所以であるのであり、ゲーテ的に言えば良き誤解ということになるのだろうと思う。

もしも三枝さんがこのアンケートに答えるとして、どういう回答をしようであろうか。あるいは用意しているであろうか。普段から抱いているトラークルのイメージというものがあると思うので、質問したわけで、こういうことは研究上非常に大事な事でまた長年研究していて初めてそういうイメージに到達出来、あるいはそういうイメージを確定、確信出来るということになると思うので質問したわけである。

三枝 : 私は詩人ではないのでそういう質問を受けるとは思わなかった。しかしトラークルの詩の研究者のはしくれとしてこういう質問に答えるべきではあろうと思う。このアンケートに則していえば、その後項「あなたは20世紀のドイツ語文学において彼の作品にどのようなランク付けをしますか。」に対してはもちろん第一級のランク付けをする。その前項「ゲオルク・トラークルの作品あるいはその人となり詩についてのあなたの理解とあなたの創作によって何らかの点で重要でありましたか、あるいはありますか。」に対しては私は詩人でないで答える資格はない。ただトラークルの研究者の立場からすれば、トラークルあるいはその詩のイメージは、ある程度把握してきたつもりである。しかしそれは断片的には答える用意はあるが、全体的に述べるべきであると思うので機会を改めて公表したいと思う。

宮原朗 : 短歌を詠む場合はいかがであろうか。

三枝 : トラークルの詩と私の短歌は関わりがないような気がする。同じ詩歌といってもドイツの詩と短歌では本質的に相当の懸隔があることは言うまでもない

が、私はアララギ系の短歌会に所属し作歌しており、その制約あるいは束縛があるので影響が現れにくいというところもあると思うし、むしろ影響を受けうる、あるいは模倣できるということは、ある程度才能があるわけで、私の場合はそれ以下ということであろう。

宮原 : 内面的な面ではいかがであろうか。

三枝 : 詩と短歌、差はあるが、創作というプロセスは共通するものがあるわけで、創作の際の心理というものが少しは分かるように思える。その点でトラークルの詩の研究をする上では少しはプラスになっているのではないかと思う。

『夢の中のセバスチャン』 試論 I

高橋 喜郎

Georg Trakl の『Sebastian im Traum』の第1節を Hans Weichselbaumのトラークル伝の記述と対比しながら、詩人の伝記的側面に重点を置いて論証を試みた。

第一連の〈Trunken vom Saft des Mohns〉は、トラークルの母が麻薬中毒者であったことと一致する。また〈ein bärtiges Antlitz〉は、詩人の父の写真がいずれも髭をたくわえていることから、トラークルの父であることが推測できる。

第二連の〈altes Hausgerät / Der Väter / Lag im Verfall〉という箇所は、トラークルの母の友人が、詩人の母の部屋を訪れた時、「朽木と香りのまざりあって、えも言われぬ匂いがした。」という証言と一致する。

第三連もまた伝記的事実に基づいている。トラークルは、5歳の時はじめて入水自殺を試みたと言われている。また詩人の親友であったブッシュベックの証言によると、トラークルは激しく動いているものに怒りを感じるらしく、走っている馬の前に身を投げ出して馬を止めようとしたことがあったという。

第四連には、〈Sankt Peters herbstlichen Friedhof ging〉も出てくるが、ヴァイクセルバウムの伝記によると、トラークルは、母に連れられて、よく聖ペテロの墓地を散歩したらしく、その事実と一致している。

第五連においても、〈da er im Schlaf die dämmernde Wendeltreppe hinabstieg〉のWendeltreppeは、詩人が幼少年期を過ごした家にあるものと同定できる。

以上のことから、『Sebastian im Traum』の第一節は、トラークルの幼少年期の事実を核として成立したことが分かる。しかし、それによってこの詩の全体が解明できる訳ではない。例えば、第三連に出てくる〈Ruh und Antlitz〉は何らかの解釈を拒んでいる。また同じ連にある〈In grauer Nacht sein Stern über ihn kam;〉が何らかの伝記的事実と結び付けて解釈出来るかどうか不明である。

トラークルの詩における幼時の表現は、ポジティブなもの（『Elis I』）からネガティブなもの（『Vorhölle』）まで非常に多様であるが、ここでは、殆ど脚色されていない幼時の体験がそのまま語られていると理解されうる。〈Liebe und herbstliche Träumerei〉には明らかに幼時のポジティブな側面が語られているのに対し、〈traurige Kind-

heit > ではネガティブな側面が述べられている。

詩という形式を持つ以上、ここには象徴化された表現もあるが、全体としては、最も脚色の少ない幼時表現が見られると結論することが出来るだろう。

伊藤卓立 : 15行目の Sternは肯定的あるいは否定的どちらに捉えられているのであろうか。

高橋 : In grauer Nacht との結び付きで、どちらかという、否定的なイメージで捉えられるのではないか。

伊藤 : ここは Geschick 位に考えられるのでないか。

高橋 : そう思う。Stern と言うと、本来ネガティブな意味ではない。タロットカードでは Sonneが一番良いカードで、その次は Sternであるから。古い占星術では Sternはポジティブにとる習慣があるのではないか。

植和田光晴: sein Sternは惑星なのか、恒星なのか。

高橋 : そこは詳らかにしない。

植和田 : セバスチャンは親衛隊で反逆して死刑にあつてまた復活する聖人であるが、ザルツブルクの山の麓に聖セバスチャン教会がある。そうするとセバスチャン像がより具体的なイメージとなってくるのではないか。それがこの詩では最後にやっと現れてくる。否定的、肯定的であるのかという二分法で捉えてみると随分暗い終末のように思える。

宮原朗 : セバスチャン像は実際見ていたと思うのであるが。

高橋 : そう思う。第一節の感じによると、ほとんど事実そのままを織り込んでいるわけで、自分の幼時に体験したことをかなり忠実に綴っている。『夢と錯乱 (Traum und Umnachtung)』はかなりフィクションが入ってきているが、この詩は実像に近いものと思う。

宮原 : 第2節の32行目の Die blaue Gestalt des Menschen durch seine Legendeの Menschen は何かの聖者あるいはキリストであり、セバスチャンではないのか。

高橋 : これは当然 Legendeが無くても blauen という色彩語が heilig なものを表しているから、当然聖者と思うのであるが、ただキリストというよりセバスチャンととった方がよいのではないか。セバスチャン像は体中に矢が当たっている像であるからこの部分はよく分かる。

宮原 : セバスチャン像を実際見ていて、それが強く印象に残っていて「Sebastian im Traum」という表題が出てきたと見てよいか。

高橋 : そう思う。ただもう一つは、やはりトラークルと同じ名前を持つゲオルクとセバスチャンとは同じディオクレティアヌス帝時代の後期に殉教したので、ある種の親近感があって、このセバスチャンという名前が選ばれたものと思う。

両角正司 : 『エリス I (Elis I)』や『カスパー・ハウザー (Kaspar Hauser)』も同じようにトラークル個人の事跡のある部分を象徴して作られたのか。

- 高橋 : 詩によって強調されている部分が違っていると思うのであるが、『夢の中のセバスチャン』はどちらかというと特別な脚色がない形で伝記的な事実を提示するように詩が作られているのであるが、『エリス I』では理想化された幼年時が提示されている。『カスパール・ハウザー』も幼時の理想郷から町の中へ連れ出されて、その幼時の純粋さを失って最後には死ぬ形で終わることになる。したがって二面的に、要するに幼時とそれと対照的な町を登場させてある程度両者を表現している。『夢と錯乱』は逆に暗い面ばかりを描いている。『幼年時代(Kindheit)』はどちらかというとネガティブでもなく、ポジティブでもない。
- 植和田 : 「Sebastian im Traum」という表題は詩集全体のタイトルにもなっているわけであるから、これはかなり重要視していたのであろう。
- 高橋 : 逆に言えば別稿があれば色々な解釈の可能性はある。今回はヴァイクセルバウムの伝記を参考にして論じてみた。
- 伊藤 : 第 2 節の 30 行目の Kalvarienberg は伝記的事実としてどういう事跡があったのか。またこの場合 des Menschen がセバスチャンであれば Seine Legende の seine は誰か。キリスト像にも傷口があって血を流しているものがある。しかし絵に描かれているセバスチャン像の場合通常傷口は一箇所ではなく何箇所もある。Kalvarienberg と Aus der Wunde unter Herzen purpurn das Blut rann と結び付けるとセバスチャンではなくキリストに近い姿になってしまう。des Menschen と seine Legende の seine は相当強いと思う。しかも次の行 0 wie leise stand in dunkler Seele das Krenz auf. には十字架が出てくる。もちろんセバスチャンも十字架にかけられている画像もあるから構わないのであるが。
- 高橋 : これを最初に読んだ頃はキリストと考えていた。今のところは決定が付かないので次回に譲りたい。
- 伊藤 : セバスチャンの絵画の場合は、矢が刺さったままで抜けていず、それも一本ではなく数本足まで刺さっている。しかしここでは傷口は単数である。
- 三枝 : ザルツブルクにあるセバスチャン像がどういうものか確かめてみる要があるう。

< コラム >

私の好きなトラークルの詩

三枝 紘一: 『Farbiger Herbst(多彩なる秋)』

この詩は初期の詩に属するもので、『1909年集』に収められているが、後にその第四連が差し替えられて『Musik in Mirabel (ミラベルの音楽)』として『詩集』にも収められた。この詩はまだ詩的主体の一定のパースペクティブが看取される。おそらくミラベル公園が望まれる建物の一室の窓からの視野にある景が並列されているが、

それらは形象性に富み、文字通り多彩であり、同時に各形象は明確である。またこの詩に漂う情調も破綻がなく纏まりのある詩である。『Musik in Mirabel』よりこの詩を好むのは、以上述べたことの他に、前者の差し替えられた第四連が、まだ同じように脚韻を踏みながらも、表現主義の詩の様式のメルクマールの一つの並列様式、その内でもその極端化された様式である行様式で構成され、前三連の形式と異なっており様式的統一性を壊しているからである。また新しい象徴的な形象 Ein weißer Fremdlingやその詩的主体を欠く身体の一部の動作 Das Ohr hört ... 等の表現が見られ前三連との表現形式との間に違和感を生ぜせしめていることも詩の統一性を欠かしめている。このことも表現は古いかも知れないが、この詩の方を好む所以である。

高橋 喜郎：『Kaspar Hauser Lied (カスパー・ハウザーの歌)』

トラークルの死後、1919年に発刊された詩集(Dichtungen)は、ほぼ年代を追う形で三部構成になっている。その構成に従ってトラークルの詩を初期・中期・後期に分けることが可能であるなら、中期の詩群の中に、ある意味では最も円熟した詩人の個性が発揮されているに違いない。この時期の詩の多くはエレギーの詩形を幾分崩したスタイルで書かれている。ここにも詩人の敬愛したヘルダーリンの影響を見て取ることができる。しかし、ここには二人の詩人の決定的な相違も感じられる。ヘルダーリンのエレギーは快速調である。緩慢な速度で朗読すれば、詩の力は失われてしまう。これに対してトラークルの詩は、普通より緩やかに読んだ方が感じが出るような気がする。

しかし、この詩はそれらの詩群の中にあってほとんど例外的である。イアンボスを基調とした韻律構成になっているためか、アレグロかプレストで読まざるを得ない。この詩の快速調は、中心に置かれた < Reiter > という言葉と呼応しているのかも知れない。確かにリズムカルである。トラークルのこの時期の詩の色彩は青い靄に包み込まれ、くすんだ感じのものが多いが、この詩の色彩は限りなく純色に近い輝きを見せている。buntという言葉がそのままこの詩に当てはまるような気がする。この生命感あふれる詩は、しかしながら主人公の詩によって幕を閉じる。< der Ungeborene > は、無垢なる存在を象徴しているのだろう。無垢なる者にとっては、この世は生き難い。そんな詩人のペシミズムを感じる。最後の行に < silbern > が出てくるが、詩人はこの語に至るまでにかかなり逡巡している。この神秘的な色彩語が、ここでは < der Ungeborene > と結び付いて、血腥い殺害の情景を異化し、詩に美しい余韻を与えている。

1999年度活動報告

1. 6月22日(土) 午前10時より12時迄春季総会及び研究発表会が上智大学で開催される。

出席者： 伊藤卓立、植和田光晴、三枝紘一、高橋喜郎、瀧田夏樹、西田英樹、
前田和美、両角正司、宮原 朗

総会 (1)1998年度の本会の決算が報告され承認された(別掲)。

- (2)1999年度の秋季総会及び研究会は、徳島大学で日本独文学会が開催されるが、これにどれだけの本会の会員が参加されるかで、開かれるか否かがほぼ決定されてしまうので、意向をお伺いしたところ、今回出席者の内 7名の方が独文学会に出席予定であった。したがって開催の方向で準備をすることになった。
- (3)懸案である研究の統一テーマの件は、昨年秋の総会において、「トラークルと近・現代詩」のような広範なテーマを先に扱い、後にトラークルにおける特殊なテーマを扱うべきであるという意見と、両者を平行して扱うべきであるという意見が出されたが、結論をみるに至らなかった。また春の幹事会においてもこれが論議された。たとえば「トラークルと表現主義」のようなテーマで表現主義の概念を規定し、またその表徴を明らかにし、また他の表現主義詩人をトラークルと比較し、トラークルの位置づけをしたらいいのではないかという意見が出された。これを受けてこの問題について討議された。しかしトラークルの後代の詩人への影響を統一テーマにしたらよいのではないか、という意見が出たが、時間的制約もあり、それ以上発展をみるには至らなかった。したがってこの件についての結論はまた持ち越しとなった。
- (4)余剰金があるので、これを一助とし、近い将来特集号として論文集を出したらよいのではないかという提案があった。

[報告] ザルツブルクのトラークル研究記念館の開設25周年記念の小冊子が館長のヴァイクセルバウム氏より送付されてきたが、そこに当会が紹介されている。

研究発表会

三枝絃一：トラークルの評価と受容 — ドイツ語圏の現代詩人の場合

高橋喜郎：『夢の中のセバスチャン』試論 I

(当日の午後 6時より「美味小屋」において懇親会が開かれ 3名の参加があった)

1998年度決算報告

自1998年 4月 1日至1999年 3月31日

収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年度繰越金	66743	切手代	10880
本年度会費	45000	封筒代	358
春季例会懇親会残金	45	葉書代	1100
		協会会報印刷代	14000
		<u>本年度支出合計</u>	26338
		<u>次年度へ繰越</u>	85450
		(内、本年度剰余金)	18707)
<u>合 計</u>	111788	<u>合 計</u>	111788

2. 秋の例会は、会場の確保等諸般の事情により中止になった。
3. 3月9日東京の新宿において幹事会が開催された。
出席者：伊藤卓立、三枝紘一、高橋喜郎
4. 3月31日1999年度会報が発行される。

お知らせ

1. 会報に会費用の振込用紙を同封いたしましたので会費の御納入をよろしくお願い申し上げます。
2. 春の例会は次のように行われます。
日時：6月10日(土) 午前10時から12時迄
会場：調布市文化会館「たづくり」305 会議室
 - 1) 総会
 - 2) 研究発表会：高橋喜郎「Sebastian im Traum 試論 II」
三枝紘一「モンタージュ手法とトラークルの詩」

編集後記

今回も会報をお手許にお届けするのが、だいぶ遅れてしまい、申し訳ございませんでした。まずお詫び申し上げます。

さて今年は2000年。20世紀最後の年として一般に認識されるようになってはきましたがその代わりミレニアムという言葉を持ち出すことによって新しいミレニアムが今年始まったような言い方がなされるようになっていきます。新しいミレニアムに光明を見いだそうとしたい心情の焦りでしょうか。しかし、いずれにせよトラークル没後 100年となる2014年が視野に入るようになってきました。

この20世紀においてトラークル研究はどのような変遷を辿り、どのような成果をあげてきたのでしょうか。主にその詩の魔力的魅力に惹きつけられ、難解であるが、否、それ故に夥しい研究がなされてきました。確かに Kemper の稿体研究を端著としてその精細な形式研究等の成果には見るべきものがありますが、Brinkmann が言っているようにトラークル研究は往々にして「wahrer Tummelplatz aller möglichen Formen des >approach< >>」のようになってしまい、必ずしもその多くは後続の研究者の役に立っているとは思われません。やはりトラークルの詩の魅力は奈辺にあるかという原点に立つその本質的研究が最も肝要でしょう。その意味で成立順に詩が並べられているインスブルック版の完結が待たれます。

山に登るにつれて新しいパースペクティブが展げてくるように、トラークルと時代を隔つにつれて詩人の新しい面が見えて来ることを期待しつつ、新しいミレニアムを迎えたいと思います。それには、山に登るのに苦労が必要であると同じように、勿論たゆまぬ解明の努力を抜きにしては考えられないのでしょうか。

(さ)